お分　科　会	中(地理①)	郡　市　名	岡　崎
提　案　者	岡崎市立翔南中学校		中　根　良　輔

研究題目

社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし，仲間とかかわりながら問題の解決を図る社会科の授業

～２年生地理的分野「中部地方－伝統産業は存続していくことができるのか―」の実践を通して～

１　はじめに

岡崎市の社会科部は，研究テーマ「社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし，仲間とかかわりながら問題の解決を図る社会科の授業」を受け，3 年前から授業実践を行ってきた。昨年度の研究を通して得られた成果と課題は以下の通りである。

〈実践単元〉　３年生　公民的分野「これからの人権保障」

＜成果＞

・動画投稿サイトを活用して事象と出会わせることで、子どもが問題を身近に感じるようになり、その後の追究に意欲的に参加することができた。

・インターネットで検索した資料や文書資料だけでなく、街角アンケートをとったり、関係機関に訪問して調査したりして追究を進めた結果、事象を具体的に捉えることができ、それを基に自分なりの考えを構築することができた。

・個人追究を基にした話し合いを通して、事象を多面的にとらえることができるようになり、自分の考えをより深めることができた。

＜課題＞

・単元の終末に家族も巻き込んだ活動を計画したが、家庭と連携をとることが難しく、子どもの社会参画への意識を十分に高めることができなかった。

これを受けて，本研究では子どもが持続可能な社会の実現に向け，仲間とのかかわりを通して，多面的に社会的事象をとらえ、社会参画に向けた意識を高める姿の育成に重点を置きたいと考えた。

２　研究主題のとらえ

「仲間とかかわりながら問題の解決を図る」

「仲間」とは，共に学び合う学級の子どもたちだけでなく，学びを通してかかわるすべての人のことを意味すると考える。「仲間とかかわりながら課題の解決を図る」とは，課題解決のために学習活動でかかわる様々な立場の考え方を知り自分の考えの根拠とすることである。また、その考え方を批判的にとらえたり新たな視点として付け加えたりしながら、社会的事象を多面的にとらえることで自らの考えを深めていくことである。

「社会に参画していこうとする」

「社会に参画していこうとする」とは、社会的事象から生まれた問題を仲間とかかわりながら多面的にとらえ自分なりの解決策を見出すことで、参画への意識を高めたり、行動化へのきっかけをつくったりする姿をめざしていくことである。

３　めざす子ども像

①仲間とのかかわりを通して、他者の意見を批判的にとらえたり新たな視点を取り入れたりして、多面的に社会的事象をとらえ、自らの考えをより深めていくことができる子ども。

②社会的事象と自分とのつながりを見出し課題追究への切実感を高め、自らの考えに確かな根拠がもてるよう追究活動に取り組み、その考えをいかして社会に参画していこうとする子ども。

4　研究の仮説と手立て

【仮説Ⅰ】	**子どもたちの構築した考えを支えながら効果的に資料を提示したり、仲間とかかわる場面を工夫したりすれば、多面的に事象をとらえ、自らの考えを深めていくことができるであろう。**
手立て①	**子どもたちの考えを支える授業日記**・・・朱書きや対話によって子どもたちの考えを支える。
手立て②	**効果的なタイミングでの資料の提示**・・・子どもたちの追究活動のきっかけとしたり、かかわり合いの活動で新たな視点を与え、考えを揺さぶったりするなどのタイミングで活用する。
手立て③	**2度のかかわり合いの設定**・・・本単元では2回のかかわり合いの時間を設定する。1回目は、追究活動を行う前に設定し、追究の視点を明確にする。2回目は追究活動を終え、根拠のある考えを構築できたところで設定し、多面的に事象をとらえることができるようにする。
【仮説Ⅱ】	**子どもたちにとって身近な教材を取り上げ、子どもたちの意識に沿って単元を構想すれば、子どもたちの社会参画への意欲を高めることができるであろう。**
手立て④	**子どもたちにとって身近な教材の活用**・・・地域教材を取り上げることで生徒が問題を身近に感じられるようにし、切実感をもって課題追究することができるようにする。今回教材としたのは学区に住む三河花火職人のつくる国産花火「ドラゴン」である。純国産花火である「ドラゴン」の復活はメディアでも取り上げられており、伝統産業の存続に向けて新しい取り組みが行われてきた事業である。
手立て⑤	**子どもの意識が連続する単元構成**・・・意欲的に追究活動が行えるよう、子どもたちの意識を大切にして単元を構成する。

5　単元目標

①　中部地方で続けられている伝統産業や地場産業について関心をもち、その技術を継承していくための工夫や様々な取り組みについて、意欲的に調べることができる。　**【社会的事象への関心・意欲・態度】**

②　純国産の花火が今後も存続していくことができるかについて、資料や聞き取り調査、他者の意見を参考にして自らの考えを構築し、仲間とのかかわり合いを通して自らの考えを深めていくことができる。　**【社会的な思考・判断・表現】**

③　伝統産業の現状について資料や聞き取り調査から読み取った内容を整理し、調べた内容を自らの意見を構築するための根拠とすることができる。　**【資料活用の技能】**

④　伝統産業や地場産業の古くから伝わる技術の高さやその価値について理解し、今後存続させていくために様々な工夫が行われていることを知ることができる。　**【社会的事象についての知識・理解】**

6　指導計画（10時間完了）

時数	学習課題	学習内容	手立て
1	中部地方の自然環境の特色をまとめよう	・東海、中央高地、北陸の３つの地域の気候の特徴とその要因についてまとめる。 ・中部地方の地形についてまとめる。	**手立て①：**授業ごとに感想を書いたり、自分の考えを書いたりする授業日記の時間を設定する。（随時）
	中部地方は気候によって３つの地域に分かれているね		
2	中部地方の３つの地域ではどのような産業が行われているのだろう	・３つの地域で行われている産業の特徴を調べる（東海＝自動車、機械）（中央高地＝果樹園、精密機械）（北陸＝伝統産業、地場産業）。 ・岡崎市内で行われている伝統産業、地場産業について調べる。	**手立て④**：岡崎市内の伝統産業を取り上げ、問題を身近にする。 **手立て②：**おかざき匠の会のパンフレットを配布し、岡崎の伝統産業に関心をもたせる。
	北陸では伝統産業が行われている。でも、身近なところでも伝統産業は行われているよ		
3	伝統産業の現状を調べよう	・伝統産業へのイメージについて発表する。 ・資料を見て伝統産業の現状を把握する。 ・身近にある伝統産業である三河花火について考える。	**手立て②：**伝統産業の衰退が読み取れる自作資料を提示する。 **手立て④：**学区にお店があり子どもたちにもなじみのある伝統産業である三河花火に出会わせる。
	伝統産業は、衰退していきそう 学区にある三河花火のお店は国産の材料で花火を作っていてすごいな		

4	国産の花火は存続可能か考えよう	・国産花火は存続していくことができるのかについて話し合う。 ・追究の視点を明確にする。 【追究の視点】 品質・技術・安全面・価格・後継者・消費者	**手立て①：**存続していくかどうかについて授業日記により子どもたちの考えを把握する。 **手立て③：**個人追究の視点を明確にするのため1回目のかかわり合いを行う。 **手立て⑤：**子どもたちから国産花火の今後についての意見、感想が出たところで、単元の課題を設定する。 **手立て⑤：**追究の視点を明確にすることで、次時からの追究活動への意欲を高める。
	【単元の学習課題】 **国産の花火は今後も存続できるのだろうか**		
	国産の花火が存続できるかについて、調べてみよう		
5・6	国産花火の存続について調べよう	・図書資料、インターネットでの調査を行う。 ・同じ考えをもつ生徒での意見の整理を行う。	**手立て①：**子どもたちの授業日記から追究の内容を把握し、朱書きをして考えを支えられるようにする。 **手立て⑤：**調べを進める中で疑問に思ったことを解決するために、花火職人の方を呼ぶことを伝える。
	国産花火が存続していくことができるのかについて、自分の根拠をもとう		
7	太田さんの話を聞いて国産花火の存続について考えよう	・国産花火を作る太田煙火製造所の太田さんから話を聞く。 ・技術の高さについて考え、生産者の視点も加える。 ・実際に国産の花火を見ることで、外国産との違いを明確にする。	**手立て③：**国産花火を作り続ける太田煙火製造所の太田さんから、伝統産業を守り続けることの難しさと必要性について話をしていただく。（子どもたちは資料の一つとして活用） **手立て⑤：**自らの意見を持つことができたところで話し合いの場を設定することを伝える.
	国産花火が存続していくかどうかについて、意見を出し合おう		
8	国産の花火は今後も存続していくことができるのか考えよう	・「存続する」、「存続しない」について意見をかかわらせる。 ・材料を製造する会社の資料から、下請けの会社の技術力についての視点をもつ。	**手立て③：**「存続してく」「存続しない」という互いの意見をかかわらせる場を設定する。多面的に国産花火を捉えられるようにする。 **手立て②：**花火の材料を作る保田紙工の資料を配付し、下請けの視点ももたせる。
	国産花火を守っていくために様々な工夫が行われているんだね。 他の伝統産業はどうなっているのだろう		
9 + 随時	他の伝統産業の生き残りをかけた工夫を調べよう	・第２時で挙げられた伝統産業について調べる。 ・電話での聞き取り調査を行う。	**手立て②：**国産花火で得た視点を生かして、他の伝統産業の工夫について調べる。その際、電話での調査を行い、資料として活用する。
	高い技術を守っていくために、どの伝統産業も様々な工夫が行われていたね		
１０	伝統産業のこれからの姿を考えよう	・調べた内容を発表する。 ・伝統産業を存続していくための工夫をまとめる。	**手立て⑤：**伝統産業で行われている工夫を全体で共有できるよう、調べた内容を発表する。

６　抽出生徒

生徒Ａについて…学習面においては意欲的に取り組むことはできるが、社会科の学習に対しては，苦手意識をもっている。課題に対して自分の意見を持つことはできるものの、思いを言葉で表現することや意見をかかわらせる場で発言することは苦手である。また、自らの考えをもつことができたとき、それを変化させたり他者の意見を取り入れたりする姿はあまり見られない。

７　授業実践

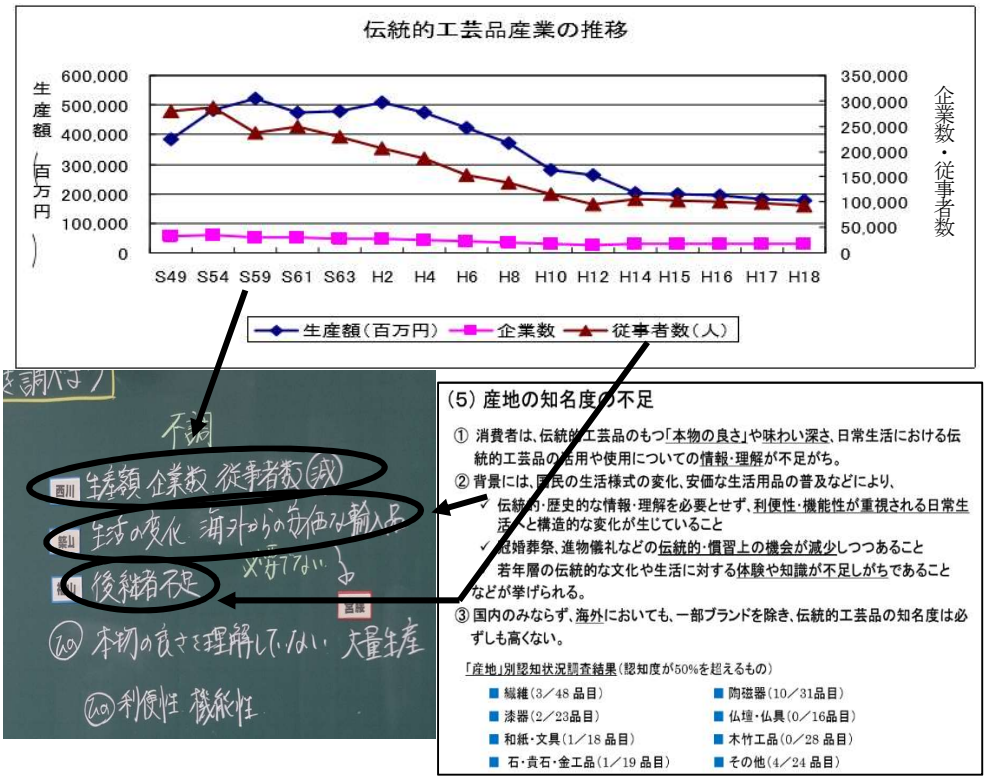
（１）伝統産業の現状を知る子どもたち　（第１時から第３時）

第１時で中部地方の気候や地形の特徴について学んだのち、第２時で東海、中央高地、北陸の３つの地域の特徴を生かした産業について学習した。そこで、北陸では地場産業や伝統産業が盛んに行われていることが明らかとなり、一人の子どもが「伝統産業って岡崎にもあるよね」とつぶやいた。教師はそのつぶやきを全体に広めるため、「このあたりで行われている伝統産業は何か知っているかな」と発問した。子どもたちは、小学校で学習した内容である八丁味噌、石工など次々に伝統産業を挙げることができた。さらに、子どもたちがより伝統産業を身近に感じられるよう、商工会議所が発行している「おかざき匠の会」のパンフレットを配布した。

子どもたちが伝統産業へ意識を向けたところで、第３時では伝統産業の置かれている現状について考える時間

を設定した。授業の初めに伝統産業に対するイメージを子どもたちに尋ねた。「人気がない」「高齢者の仕事」「手作りで大変」など子どもたちからは明るい言葉は聞かれなかった。その後、伝統的工芸品産業振興協会の統計から教師が自作した資料をもとに伝統産業の現状を読み取った。資料 1 は、第 3 時で配付した資料とそれを読み取った子どもたちの意見を示したものである。子どもたちは資料から「生産額、企業数、従事者数が減少している」「海外から安価な輸入品が増えている」「後継者不足」などの現状を読み取り、伝統産業に対するマイナスなイメージをより強めていた。

【資料 1】第 3 時で配付した資料と子どもたちの意見



【資料 2】第 3 時の生徒 A の授業日記

国産の伝統工芸品は値段が高く、値段の安い外国産の製品が入ってくると外国産の製品を買う人が多くなるのと、後継者が 30 年で 3 分の 1 に減少していて後継者不足になっていることから、伝統産業は続いていかないと思う。

資料 2 は生徒 A の第 3 時の授業日記である。生徒 A は「値段が高い」「後継者が 3 分の 1 に減少」という点を読み取り、「続いていかない」と結論づけていた。

岡崎市内にも多くの伝統産業が存在するが、子どもたちはその価値を認識しておらず「なくなっても仕方がない」と考える意見がほとんどであった（存続していく：2 人　存続していかない：34 人）。そのため、教師はより身近な伝統産業と出会わせることで、その価値に気づかせ伝統を守ることの大切さを感じさせたいと考えた。

（2）三河花火の追究をする子どもたち　（第 4 時から第 7 時）

第 4 時の冒頭で「ドラゴン」という名の花火を紹介した。この「ドラゴン」は本校の学区に住む国産花火の製造にこだわり続けている花火師が製造していた花火である（本実践での「国産」とは、原材料から 100%国内で製造されたものを指す）。この「ドラゴン」は、2008 年に生産中止となったが、復刻版として 2017 年の夏に復活することが決定している。

子どもたちへ「ドラゴン」についての説明をすると、複数の子どもから「今ごろになって国産が復活して売れるのか」、「伝統産業の現状が厳しい中で、なぜわざわざ復活させるのか」という様々な疑問の声が上がった。そこで、単元の学習課題として「国産の花火は今後も存続できるのだろうか」を設定し、追究していくことにした。

前時までに伝統産業に対してマイナスのイメージをもっていたため、多くの子は「存続していかない」と考えていた。しかし、花火は子どもたちにとって身近な存在であったため、数名の子が「存続していく」という考えをもっていた。（存続していく：8 人　存続していかない：28 人）資料 3 は第 4 時の授業記録の一部である。

「存続していかない」と考えた子どもは、C1「国産の物は高い」、C3「後継者がいない」など、前時までの学習を基に発言した。一方、「存続していく」と考えた子からは、C4、5、6 のような予測にとどまり事実に裏付けされた発言はあまり見られなかった。しかし、C5「国産花火の良さ」、C6「安全性」など、今後追究していく

べきキーワードに着目することはできていた。

ここで教師が「今出てきたことは予想が多いけど、本当に事実なのか」と発問すると、子どもたちは「もっと調べないとわからない」と答えた。そこで、次時から個人追究を行うように子どもたちへ伝えた。個人追究をするにあたって、どんなことを調べたらよいかを聞くと、授業の内容から「品質・技術」、「価格」、「後継者」という視点が挙がったので、これらの視点から追究を進めることにした。

【資料3】第４時の授業記録

T	国産の花火が復活するっていうことを聞いたんだけど、これから存続していくことはできるのかな。
C１	私は無理だと思います。この前見たけど国産の物は高いからです。
C２	やっぱり花火は質より量だと思います。そもそもいい花火も安い花火も見分けがつかない。
C３	僕も無理だと思います。伝統産業では後継者がいないからです。 （中略）
T	存続できる側の人はどうですか。
C４	高くても買いたいという人はいると思います。
C５	国産の花火の良さっていうものがあるのだと思います。
C６	日本の物は安全性が高い。だから今後も売れていくと思います。
C７	C４は買いたい人がいると言っていたけど、数的には多くなく、リピーターはほとんどいないと思います。

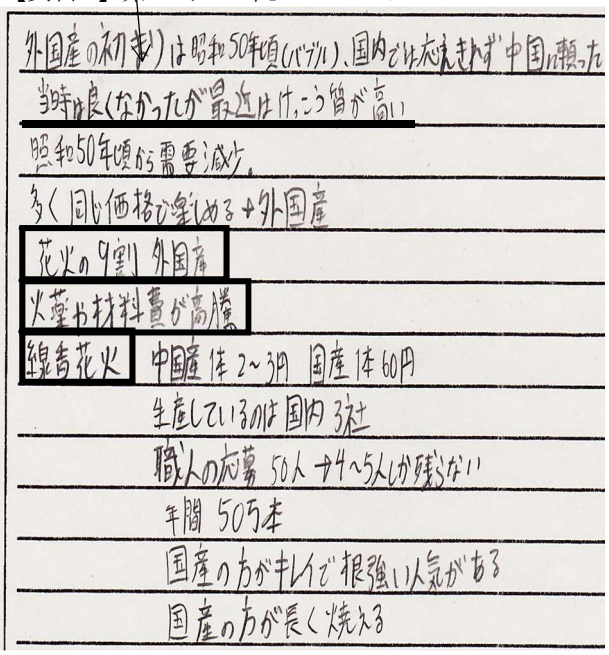
資料４は生徒Ａの第４時の授業日記である。生徒Ａは前時の内容を踏まえて「存続していかない」と考えていた。しかし、授業で様々な意見に触れることで、「（自分が普段使ってる花火は）国産なのか外国産なのかわからないので調べてみたい」と関心を高めている姿が見られた。また、「質や技術の問題は、実際どのくらい違うのかわからないので調べてみたい」と追究の視点を明確にすることもできた。

【資料４】第４時の生徒Ａの授業日記　立場「存続していかない」

僕は毎年、いとこと花火をするのでいつも使っているのは国産なのか外国産なのかわからないので調べてみたいと思った。質や技術の問題は実際どのくらい違うのかわからないので調べてみたいと思った。

第５時と第６時では、第４時で明らかにしたそれぞれの追究の視点を基に、個人追究を行った。インターネット、図書資料、そして、日本煙火協会の資料を基に作製した教師の自作資料を活用し調べを進めた。花火の製造を調べていく中で、職人さんの苦労や技術の高さ、国産花火と輸入花火の価格の違い、花火産業における後継者不足の実態など、様々な視点から調べを進めることができた。生徒Ａは、国産と外国産の質や価格について調べていた（資料５）。外国産が輸入されるようになった当初から比べるとかなり質が向上していることや、９割が外国産であること、火薬や材料費が高騰していることなどについて丁寧に追究していた。また玩具花火の中でも、特に線香花火に着目していた。（存続していく：８人　存続していかない：28人）

【資料５】第６時の生徒Ａのノート


外国産の初まり は昭和50年頃(ブラジル)、国内では対応できず中国に頼った
当時は良くなかったが最近はけっこう質が高い
照和50年頃から需要減少。
多く同じ価格で楽しめる→外国産
花火の9割 外国産
火薬や材料費が高騰
線香花火　中国産 1本 2～3円　国産 1本 60円
生産しているのは国内3社
職人の応募 50人→4～5人しか残らない
年間 50万本
国産の方がキレイで根強い人気がある
国産の方が長く燃える

個人追究をしていく中で、価格は国産と外国産でどれくらい違っているのか、また、国産は苦しい状況であるのに、なぜ「ドラゴン」が復活するのかなど新たに疑問をもつことができた子もいた。そこで、「ドラゴン」を製造している花火師の太田恒司さんをゲストティーチャーとして招き、子どもたちのもっている疑問を直接聞くことにした。また、この時点で多くの子どもは、花火を使う側の視点で追究していたので、花火を作る側の視点にも立って多面的に伝統産業を捉えられるようにしたいと考えた。

第７時で、太田さんに教室に来ていただいて話を聞いた。話の内容は、国産の花火は一度生産をやめてしまうと、原料の調達も難しくなり復活が困難なこと、「ドラゴン」はまだ原料を作ってくれる場所があったのでかろうじて復活できたこと、復活を望む多くの声があったこと、資金集めにクラウドファンディングを使ったことなどであった。さらに、実際に「ドラゴン」を見せていただいた。同等の価格の外国産の噴出花火と比較して、子ど

もたちは改めて国産の質の高さを感じていた。また、火の粉が熱くない花火を見ることもでき、質の中でも安全性に着目した子もいた。

資料６は、個人追究前後の第４時と第７時の子どもたちの考えを比較したものである。これまでの個人追究や太田さんの話から、子どもたちは具体的な根拠をもって意見を構築することができた。特に品質については、多くの子が太田さんの話を生かして自らの意見を構築していた。また、第７時までに、主に「価格」「品質」「後継者」の視点で追究を進めていたが、数名の子どもは「原材料」の視点で国産花火を捉えていた。太田さんは国産花火を復活させた要因の一つに「(国産花火を) 作り続けないと（原料もなくなり）作れなくなる」という点を挙げていた。伝統産業の存続を考えたとき、「原材料」も重要な視点となるが、多くの子どもたちはその視点をもっていない。そのため教師は次時ではこの視点を取り上げ、より多面的に国産花火について捉えさせたいと考えた。

【資料６】個人追究による子どもたちの考えの変化

＜第４時の子どもたちの意見＞

存続していく（８名）	存続していかない（２８名）
・高くても買いたい人はいると思う。 ・国産のよさがあると思う。 ・国産の方が安全そう。	・国産の伝統工芸品は値段が高い。 ・国産か外国産か見分けがつかない。 ・後継者がいない。 ・外国産の方が種類が多い。 ・外国産の方がよく売れると思う。

＜第７時終了時の子どもたちの意見＞

存続していく（１８名）	存続していかない（１７名）
・消費者が質のよいものを求めている。 ・国産は迫力があり、きれい。 ・火の粉が熱くない花火があるなど安全性が高く、信頼できる。 ・噴出する幅も狭く周りに飛び散らないようになっている。 ・国産の方が好きな人がいる。 ・国産の線香花火は根強い人気がある。 ・ｸﾗｳﾄﾞﾌｧﾝﾃﾞｨﾝｸﾞで目標の 60 万円より多い 207 万円が集まった。人気がある。 ・三河は噴出花火発祥の地と言われ、歴史があるので守ろうとする人がいる。 ・作るのをやめると原材料もなくなる。	・国産の良さはなかなか伝わらない。 ・中国産の花火の質がよくなっている。 ・安い外国産の方が売れる。 ・後継者がいない。 ・国内で作るには原料が不足している。 ・太田さんが元に戻すのは難しいと言った。 ・純国産品は数%、９割以上が外国産。 ・原料を作る会社が減っている。 ・国産といいながら、外国の材料を使っている物もある。

【資料７】第７時の生徒Ａの授業日記　立場「存続していく」

今回は話を聞いてみて花火の職人さんたちも何も考えずにやっている訳ではなく、少しでも売れるようにいろんな工夫をしていることが分かった。質や技術はあまり変わらなくても安全性はしっかりと保証されているし、「ドラゴン」は安いので売れていくと思った。原料も再利用したものが多くて、エコだなと思った。

生徒Ａは生産者の視点、安全性の視点も取り入れながら、原材料に着目し始めていた。。価格についても、「ドラゴン」自体がそれほど高いものではないということを知り、売れていくと考えを変えた（資料７）。

（３）国産花火に存続に新たな視点をもち、自らの考えを深める子ども　（第８時から第 10 時）

第７時までに子どもたちは、国産花火について詳しく追究することができた。また原材料という視点も出てきたことから、より多面的な見方ができるように、第８時で２回目のかかわり合いの授業を行った。（資料８参照）

「存続していかない」側は、C1 の「価格」やC3 の「後継者」に関する意見をもっている子どもが多かった。これらは第４時の話し合いで明らかになっていた視点であるが、C3 の意見に対し、C4 が後継者不足を解決しようとする取り組みについて考えを述べた。後継者不足という事実を認めつつも、解決の方法が模索されていることを話すなど、個人追究から構築した意見を述べることができていた。さらにC5 も、C4 の意見に対して、外国人が後継者となることの課題をぶつけるなど、批判的な意見を出し合いながら多面的に国産花火をとらえることができた。

「存続していく」と考えた側は、C7 のような改良、アレンジという変化に着目し、生産者の努力を述べていた。また、C8 の太田さんがクラウドファンディングという方法で資金を集め、予想以上に協賛する人が多かったこという発言から、復活を望む消費者が多数いることが明らかとなった。

また、話し合いの中でC9が「原料が少ない」と発言したため、教師はすかさず生徒Aを意図的に指名した。生徒Aの「再利用している」という意見から、原料について目が向いたところで、教師は一本の筒を提示した。子どもたちは花火の筒であることはすぐに理解できた。しかし、この筒を作ったのは太田さんではなく別の会社であることを伝えると、子どもたちは困惑した顔を見せた。

そこで、教師は花火の筒を作る保田紙工の資料を配付した。子どもたちは資料を読み取り、花火職人だけでなく、原料を作る人にも支えられていることを改めて実感できたことが、C10から12の発言の内容からわかる。

資料9は、第8時の生徒Aの授業日記である。生徒Aは存続する派であったが存続しない派の意見を聞いて、後継者がいないことから存続は難しいと考え始めた。最終的には流行を取り入れた工夫があるということから、「存続してほしい」と結論づけた。そこには、国産花火への思いを高めた生徒Aの姿があった。

第8時では、他の伝統産業についても意識させたいと考えていたが、そこまで至らなかった。そこで、第9時の始めに第7時の太田さんの話を想起させた。「太田さんは伝統産業が存続していくと考えていたかな」と聞いたところ、一人の子どもが「伝統産業は存続していくだろうと言っていました。仏壇は家のサイズに合わせて小さくなって売れるように工夫していると話していました」と発言した。この発言をきっかけに、「他の伝統産業でも工夫があるんじゃないか」とつぶやいた子がいた。そこで、「他の伝統産業はどんな取り組みをしているのか」と発問し、第2時に取り上げた伝統産業に再び着目させた。子どもたちは、第9時で自分の関心のある伝統産業に分かれグループを組み、パンフレットやインターネットを見て、特徴的な取り組みや工夫を調べていた。

【資料8】第8時の授業記録

T	国産の花火が存続していくことができるのかどうか、みんなの考えを聞きたいと思います。
C1	僕は存続しない方で、国産より外国産の方が安いからです。
C2	私も存続していかない方で、外国産はパッケージがかわいくて子どももほしいと思うから。
C3	私も存続しない方で、太田さんも言っていたけど後継者がいないからです。
C4	僕は存続すると思います。後継者は少ないけど、今は外国人や関心のある人を後継者として育てている取り組みが行われています。
C5	私は存続しないと思います。外国人が後継者になっていると言っていたけど、外国人に花火の技術を伝えたことで外国でも質の高い花火が作られるようになったから、国産は減っていってしまうと思います。
C6	私も存続していくと思います。理由は太田さんが続いていくといっていたからです。存続させるためにみんなで話し合っていると言っていました。守ろうとしている人がいるから続いていくと思います。
	（中略）
C7	僕は続いていくと思います。太田さんは今風にアレンジしながら改良しているといっていました。
T	例えば？
C7	煙を出さない、音が小さい、火の粉が飛ばないとかです。
生徒A	僕は続いていくと思います。一人でも国産の花火を買いたいという人がいれば、作り続ける意味があるから、続いていけるんだと思います。
T	続いてほしいっていう人はどれくらいいるのかな？
C8	太田さんは、クラウドファンディングという方法を使って「ドラゴン」を復活させたと言っていました。60万円を目標にしていたのが207万円も集まったので、国産花火を買いたいと思っている人は大勢いると思います。
	（中略）
C9	僕は続かないと思います。今は国産の花火の原料が少ないと言っていました。原料は花火を作らないとなくなってしまうと太田さんは言っていたから厳しいと思います。
生徒A	でも、原料は別のものを作ったときにでるものを再利用しているから何とかなると思います。
T	今、原料のことが出てきたけど、これ何かわかるかな？（花火の筒を提示）
つぶやき	花火の筒の部分です。
T	そうです。これを作っているのは別の会社です。少し話を聞いてきました。資料を配ります。
	（資料の読み取り）
T	資料をみてどうですか？国産の花火はどうなっていきそうかな。
C10	外国産の筒は30%が不良品があると書いてあります。だから国産の方がいいと思います。
C11	不良品は多いけど、それだけもとの数も多いから、不良品が多くても困らないとお思います。
C12	保田さんは中国産から徐々に国産にしていると書いてありました。だから、これから国産は増えていくんだと思います。

【資料9】第8時の生徒Aの授業日記　立場「存続していかない」

存続していく派だったけど、存続しない派の人たちの意見を聞いて外国産の質も高く、後継者がいないなどの問題もあるので、存続していけない花火もあるかもしれないと思った。でも、存続していこうと流行を取り入れたり工夫したりして頑張っているので、存続してほしいと思う。

また、電話での聞き取り調査を行う子もいた。聞き取り調査をするための質問を考えた際には、「後継者」や「存続していくために行われている工夫」など、第8時の話し合いが大きくいかされ、それぞれの伝統産業での生き残りの工夫について調べた。

第10時では、調べた内容を全体で共有し、それぞれの伝統産業で行われている存続への取り組みについて考えを深めることで、伝統産業を「守っていきたい」、「守らなければならない」という思いを高めることができた。

資料10は第9時の調査で作成した生徒Aのグループのまとめである。石工について調べた生徒Aは、問題点や改善点をまとめることができた。資料11からは、「アピールできるといい」「(クラウドファンディングが) 効果的」「キャラクターを使うのも良い」と自分の考えをしっかりとまとめており、自分事として捉えていることがわかる。

【資料11】生徒Aの単元を通しての授業日記

他の伝統産業のことを聞くと品質が良いものが多いと思うので、それをもっとアピールできるといいと思う。工夫ではインターネットを使うことが多かったので、花火もクラウドファンディングでヤフーで取り扱われて関心が高まり効果的だなと思った。調べていく中で伝統工芸品が漫画やアニメとコラボしているのを見たので、キャラクターを使うのも良いと思う。調べる前は伝統産業は高くて古くさいイメージだったけど新しいことに挑戦していて、自分も伝統産業の見方を変え、花火など国産のものを大切にしていきたい。

【資料10】生徒Aのグループの石工のまとめ

8　研究の成果と課題

仮説Ⅰ　子どもたちの構築した考えを支えながら効果的に資料を提示したり、仲間とかかわる場面を工夫したりすることで、多面的に事象をとらえ、自らの考えを深めていくことができたか。

手立て①→子どもの考えやその変化を毎時間ごとにとらえることができ、授業日記を見続けたことで第8時では原材料の視点を新たに提示することができたため有効であった。

手立て②→教師の自作資料やパンフレットを活用することによって伝統産業に関する事実を的確に捉えることができた。しかし第8時で提示した保田紙工の資料は、文字ばかりで見にくくなってしまったので、資料作成について工夫が必要であった。

手立て③→本単元では2度のかかわり合いの場を設定した。1回目は第4時で行った個人追究前のかかわり合いである。そこで「価格」「品質」「後継者」などの個人追究の視点を明らかにしたことで、意欲的に追究活動を進めることができた。2回目の第8時のかかわり合いでは、友達の意見を聞いて、自らの考えをより深めたり、新たな視点にも目を向けたりすることができた。

仮説Ⅱ　子どもたちにとって身近な教材を取り上げ、子どもたちの意識に沿って単元を構想すれば、子どもたちの社会参画への意欲を高めることができたか。

手立て④→三河花火という地域教材を取り上げたことで、身近な問題として捉え、意欲的に追究活動に取り組むことができた。その結果、伝統産業を取り巻く問題について自分事として考えられるようになった。

手立て⑤→子どもたちの意識が連続するように単元構成を行った。子どもの授業日記から疑問を明確にし、問いかけをしたり、つぶやきを課題としたりしたことで、子どもたちの追究意欲を継続させることができた。しかし、教師側の誘導が強く出てしまった場面もあったので、子どもの意識を大切にした単元構成のあり方について再考していきたい。

9　終わりに

伝統産業は、何年も前から高度な技を受け継がれることによって継承されてきた。しかし、その姿は時代に合わせて少しずつ変化してきている。伝統を守ることは、その技術は変わらないものの、時代に合わせた変化が必要であり、それに対応することができない製品は、存続していくことができないと今回の実践を通して感じた。子どもたちも、伝統産業のイメージを変え、存続に向けた様々な取り組みが行われていることを実感することができていた。しかし、その変化をどこまで許すのか、伝統産業のイメージを大きく変えることに抵抗を感じる人はいないのかという次なる課題も考えられる。

本実践では、子どもたちが社会的事象に関心をもち、切実感を高めながら追究をしていくことで社会参画への一歩を踏み出したことが成果として挙げられる。今後も現代社会で起こっている事象について、様々な立場の意見に触れることで多面的にとらえ、課題解決をめざし社会に参画していこうとする子どもたちを育てていきたい。